

修士論文(要旨)

2016年1月

接触場面における三者会話の研究  
—話題転換を中心に—

指導 堀口純子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3902

曹雪倩

Master's Thesis (Abstract)  
January 2016

A Study of Conversations by Three People in Contact Situations: Focusing on the  
Alternations of Topics

Cao Xueqian  
213J3902

Master's Program in Japanese Language Education  
Graduate School of Language Education  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Sumiko Horiguch

## 目 次

<b>第一章</b>	<b>はじめに</b> .....	1
1.1	研究背景.....	1
1.2	研究動機.....	1
1.3	本稿の構成.....	1
<b>第二章</b>	<b>先行研究</b> .....	2
2.1	在日外国人留学生の社交性.....	2
2.2	接触場面の重要性.....	2
2.3	話題と話段.....	2
2.4	話題転換ストラテジー.....	3
2.5	つなぎの段.....	4
<b>第三章</b>	<b>調査概要</b> .....	5
3.1	予備調査の概要.....	5
3.2	本調査の概要.....	11
<b>第四章</b>	<b>調査の結果</b> .....	14
4.1	接触場面における三者会話の話題開始者、話題終了者、話題参加者.....	14
4.2	接触場面における三者会話の話題転換ストラテジー.....	16
4.3	データ1.....	17
4.4	データ2.....	19
4.5	データ3.....	22
4.6	データ4.....	25
<b>第五章</b>	<b>分析および考察</b> .....	29
5.1	「渡りの段」と「繋ぎの段」.....	29
5.2	接触場面における三者会話の「クッション話段」.....	32
5.3	話題転換における渡りの段の働き.....	36
5.4	接触場面における三者会話の話題転換スタイル.....	37
<b>第六章</b>	<b>まとめと今後の課題</b> .....	44
6.1	まとめ及び日本語教育への提言.....	44
6.3	今後の課題.....	45

謝辞

参考文献

巻末資料

本研究は、接触場面における三者会話の話題転換がどのように行われるのか、そこにはどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的として行った。そこで、三者による雑談会話データを集め、分析を行った。各データにおける話題開始者、話題終了者、話題参加者をそれぞれ集計し、非母語話者が話題転換においてどのような特徴を果たしているかを観察した。また、具体的な会話データを取り上げ、話題転換の特徴を考察した。

稿者は中国人留学生として、日本で勉強を始めた頃、周りに恵まれ、たくさんの日本人の友人ができた。しかし、会話をしていくうちに、次のような問題に気付いた。日本人の友人と一対一で話すときにはうまく会話を進めることができるが、三人または三人以上の場合だと、なかなか話の輪に入れなかったり、話題についていけなかったりするという問題である。稿者は当時日本語能力試験一級を取得しており、日本語が全くわからないというわけではなかった。それなら、なぜコミュニケーションがうまく取れなかったのか。どうすればうまくコミュニケーションを進めることができるのか、について詳しく知りたいと考えたため、本研究を始めた。

日本語非母語話者と日本語母語話者の協力を得て、一時間以上の雑談会話データを4組取った。会話が最も自然と考えられる45分程度の録音を書き起こし、会話を話段に分類し、更に話題のラベルを付けた。また、性差や年齢差の違いを排除するため、本研究の対象者は全て二十代の女性とした。本研究では、「話段」という概念を用いて、接触場面における三者会話を小話段に分け、それぞれに話題のラベルを付けた。各小話段において、話題開始者、話題終了者、話題参加者をそれぞれ集計した。また、話題転換戦略としては、話題開始戦略と話題終了戦略を用いて、各小話段における話題転換戦略を集計した。更に、四つの会話データにおける数を集計し、本研究で取り扱っているデータの合計を集計した。そして、具体的に話題がどのように転換されたかを詳しく分析した。

まず、四つの会話データにおける話題開始者、話題終了者、話題参加者について以下に述べる。話題開始者としては、日本語非母語話者NFが最も積極的に新しい話題を開始する役割を果たしている。特に、各会話データにおいて、日本語非母語話者は会話が沈黙に陥った時、話題開始に積極的に務めていた。新しい話題を開始することによって、その場の雰囲気をやわらげ、三者会話の話題転換を進めていったと考えられる。話題開始において、非母語話者が主役的な役割を果たしていることが観察できた。また、日本語母語話者の二人が話題開始する割合はほとんど同じであった。話題終了については、日本語非母語話者NFによる話題終了が最も多かった。しかし、三人による話題終了数には大した差がないことがわかった。特に、話題の協働的終了では、笑いによる終了がほとんどであり、三者が会話の話題を終了させることにおいて果たしている役割は均等だと言える。また、話題転換において、愉快的場の雰囲気が観察された。話題参加者については、日本語非母語話者の会話参加度が非常に高かった。ただ、接触場面における話題参加がほとんどであったのに対して、内的場面の話題参加が僅かであることが分かった。

次に、接触場面における三者会話の話題転換戦略について述べる。先述のように、話題転換戦略を話題開始戦略と話題終了戦略に分けて集計した。話題開始戦略において、最も多く使われていたのが、「話題を際立たせる表現」であり、全体の半分以上を占めている。それに対して、「呼びかけ表現」が最も少なかった。話題終了戦略については、最も多

く使われていたのが「まとめ・評価表現」であったのに対し、「声が小さくなる」及び「割り込み」が最も少なかった。

更に、接触場面における三者会話の話題転換の特徴について深く考察した。収集したデータにおいて、話題のラベル付けができない話段がいくつか見られた。それらの話段をさらに詳しく見ていくと、先行話題に対して結束性を持ちながらも、後続話題に対して話題開始の機能を果たしている特徴が見られた。本研究では、このような話段を「渡りの段」と名付けた。その他、次に新しい話題を導く話段と、後続話題との関連性が比較的弱く、先行話題を更に終了させる機能を果たしている話段も見られた。それぞれを「始まりの段」と「終わりの段」と名付ける。「始まりの段」、「渡りの段」、「終わりの段」は自然会話において、会話の唐突さを減らし、会話をよりスムーズに進行させることができると考えられる。まさに、クッション材のような機能を果たしていると考えられる。ゆえに、このような話段を「クッション話段」と総称した。

また、接触場面における話題転換スタイルについても分析を行った。話題転換スタイルとしては「直線形話題転換スタイル」と「螺旋形話題転換スタイル」が考察された。われわれが最も想像しやすい話題転換スタイルは「直線形話題転換スタイル」である。つまり、先行話題が一般的話題終了ストラテジーにより終了され、後続話題が一般的話題開始ストラテジーにより開始され、話段と話段の間に、まとめられない情報が含まれておらず、話題がそのまま転換されることである。もう一つの話題転換スタイルは「螺旋形話題転換スタイル」である。「螺旋形話題転換スタイル」には話段内の話題転換と話題反復が含まれる。われわれの日常会話では、話題がストレートに変わるだけではなく、クッション話段が話段と話段の間に入ったり、同じ話題が反復されたりすることも多々ある。つまり、話題転換はそのまま直接行われるのではなく、螺旋的に徐々に転換されることが少なくないのである。

以上の分析と考察の結果から、接触場面における三者会話の話題転換における特徴の一端が明らかになった。日本語教育において、会話の話題展開のスタイルを学習者に提示することによって、コミュニケーションをより円滑に、スムーズに進められると考えられる。また、クッション話段の活用により、接触場面における三者会話の話題転換の唐突さを減らすことができるだろう。

## 参考文献

- 宇佐美まゆみ(2011)「改訂版:基本的な文字化の原則(Basic Transcript System for Japanese :BTSJ)によるトランスクリプトを用いた研究方法(コーディングの仕方)2011年改訂版」  
([http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/example\\_of\\_coding.pdf](http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/example_of_coding.pdf))
- 大津友美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス―「遊び」としての対立行動に注目して―」『社会言語科学』6(2)44-53, 社会言語科学会
- 大浜るい子(2006)『日本語会話におけるターン交替とあいつちに関する研究』, 溪水社
- 大場美和子(2012)『接触場面における三者会話の研究』ひつじ書房
- 加藤好崇(2006)「接触場面における文体・話題の社会言語規範」『東海大学留学生教育センター紀要』25, 1-18.
- 加藤好崇(2010)『異文化接触場面のインターアクション』東海大学出版会
- 河内彩香(2003)「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』3, 41-55.
- 許挺傑(2010)「日本語学習者の発話戦略についての一考察―第二言語習得環境にいる中上級学習者の縦断的データを用いて」『筑波応用言語学研究』17, 111-124
- 許挺傑(2012)「接触場面における日本語学習者の共同解決型発話戦略使用についての一考察―ポライトネスとの関わりを中心に―」『日本語教育研究』3, 109-125
- 串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- 木暮律子(2002)「話者交替における発話の重なり―母語場面と接触場面の会話について―」『日本語科学』11号、国立国語研究, 115-134.
- ザトラウスキー, ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析―勧誘の戦略の考察―』くろしお出版
- ザトラウスキー, ポリー(2003)「日本語の会話での話題・エピソード・発話連鎖について」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会, 227-229.
- 鈴木雅恵(1999)「日本語母語話者のスピーチレベルシフトについて―親疎関係を中心に―」『平成11年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学, 57-62
- 中井陽子(2003)「初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16,71-95.
- 中井陽子(2012)『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 中田智子(1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10(10), 52-62.
- 中山晶子(2003)『くろしおカイクックス5 親しさのコミュニケーション』くろしお出版
- ネウストプニー, J.V.(1981)「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45, 30-40.
- ネウストプニー, J.V.(1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- ネウストプニー, J.V.(1995a)『新しい日本語教育のため』大修館書店
- ネウストプニー, J.V.(1995b)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7, 67-82.